

けて変容してきた過程を、民衆の生活の中に息づく信仰の姿として鮮やかに映し出しているといえるだろう。

一点、スナナの医学に関していえば、正しいイスラームを求める民衆の「順応と葛藤」には、西洋医学の浸透という側面も分析の可能性があるだろう。それは、西洋医学とスナナの医学で、それぞれ治療の場と対象の棲み分けが行なわれていることから考えられるのではないだろうか。スナナの医学の治療者は自分が診断できない病いもあるため、病院でまず診察を受けるようにと被治療者に伝えている事例が本書には描かれていた。スナナの医学はこの棲み分けに「順応」しているように見受けられるが、西洋医学の治療者にとってこの状況はどのように映っているのだろうか。たとえばスナナの医学の治療法が、西洋医学で治療をする医師からは「非科学的」な「民間療法」として批判を浴びる可能性はあるだろう。また、スナナの医学で治療される「不治の病」も、その「不治」という認識は西洋医学の知識と不可分であり、適切な治療法も時代によって変化するだろう。そうした場合、イスラームとしての正しさを求めることと、西洋医学的な正しさを求めることの対立が生じ、スナナの医学が「葛藤」を覚えることもありうる。このような観点からみれば、宗教弾圧やイスラーム復興運動などのさまざまな条件の下でザンジバルのイスラームが変容を遂げてきたように、時代や社会の変化の中で、西洋医学がスナナの医学の治療実践に影響を与えてきたことも考えられるのではないだろうか。

とはいえ、著者の詳細かつ圧倒的な筆致、さらに治療を受けた実体験の記述は、同様に西アフリカ・セネガルにおける民衆のイスラームを調査・研究している評者にとっても、非常に興味深かった。今後の著者の調査・研究の発展を願い、本稿を締めくりたい。

深山直子・丸山淳子・木村真希子編。
『先住民からみる現代世界—わたしたちの〈あたりまえ〉に挑む』昭和堂、2018年、288 p.

中村友香*

本書は、世界各地の先住民 (indigenous peoples) をめぐる事例を取り上げる。そして先住民を名乗る人々からみた世界と、先住民概念をめぐる多種多様な運動や現象について明らかにすることを目的とした論集である。国連先住民権利宣言が先住民の定義を取って避けたことの意味を論じたうえで、先住民は「である (being)」という固定化された状態ではなく、「なる (becoming)」ものとして捉えるべきであるという視点に立つ。このことによって、先住民運動を先導してきたグループのみならず、近年先住民主張を始めた新たなグループにも注目し、先住民の「立ち現れ」方を論じる。先住民をめぐるグローバルな運動や宣言がどのような影響をもってきたのか、歴史的背景の異なる場所でどのようなそれが展開したのかについて丁寧に述べら

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

れる。先住民概念はしばしば戦略的に選択されたり、されなかったりする。こうした選択と戦略、葛藤と困難をめぐるさまざまな事例が民族誌的な観点から描かれ、先住民の多様な現れ方を理解できるような構成になっている。

まず序章「いま、なぜ先住民か」(丸山淳子、木村真希子、深山直子)では、先住民をめぐる苦難と権利運動の歴史がふりかえられる。そのうえで、2007年の国連先住民族権利宣言が、「先住民が他の人々との違いを維持しながら平等の権利を持つことが認知された」(p.7)画期的なものであったことを指摘する。筆者らは、先住民を定義することが敢えて避けられたことによって、先住民が包括的な概念に発展したこと、先住民は「なる」ものとして存在し、それをめぐるさまざまな戦略と選択の様相が立ちあがっていることを明らかにしている。

1章と2章では、2007年に採択された国連先住民族権利宣言を取り上げる。1章「先住民、先住の民、民の平等の完成形」(清水昭俊)では特に、国連先住民族権利宣言の内容を丹念になぞる。それによって清水は、「先住民」を認定する権威を、先住民以外の何者ももつべきではないことを指摘する。同時に、宣言を読み、それが『我々の歴史と実情を言い当てている』と認識する集合体が自らを『先住民』と認定」(p.42)する時に先住民が出現すると述べ、宣言と「立ち現れる」者としての先住民の関係を描く。2章「声を上げた日本の先住民族」(上村英明)では、この権利宣言が、日本における先住民

運動にとってどのような意味をもったのかを、琉球とアイヌの事例を通じて分析する。上村はこの宣言をめぐる両民族の事例を概観して、本質的な問題はほぼ何も解決していないとしつつも、日本は単一民族国家であったという神話がまかり通っていた社会枠組みの変化の兆しを指摘する。

3章から6章は、先住民や先住民になろうとする人々が、それぞれが属する国家においてどのように政府や先住民ではない人々と交渉し、権利を獲得しようとしているかが描かれる。3章「ビジネスと文化の交錯」(深山直子)では、マオリとニュージーランド政府の間に生じた商業的漁業権をめぐるコンフリクトと、前浜および海底をめぐるコンフリクトの2つの事例をあげる。そして主流社会が構築した仕組みに則ってビジネスを展開しようとする姿勢と、植民地化以前からマオリたちの間で継承されてきた自文化を根拠に、主流社会の仕組みの前提そのものに挑む姿勢という、2つの姿をもつマオリたちを描いた。4章「近代国家の成立と『先住民族』」(石垣直)では、台湾と沖縄における先住民運動の歴史と現状を整理し、その特徴を指摘する。石垣によると、両者は地理的・歴史的共通点をもつ一方で、文化的状況や近代国家の成立をめぐる歴史的経験などの違いから、「先住民族」を掲げた権利要求をめぐる展開には大きな違いが生じていることを指摘する。

5章と6章では先住民が自らの固有性を主張する際に生じる歴史の再構成という問題を取り上げる。5章「先住民の歴史を裏付ける資料とは」(水谷裕佳)では、アメリカのヤ

キが先住民としての権利を獲得するために、政府から認定されるにあたって研究者ではなく、当事者である先住民の人々がつむぐ歴史が重視されるようになりつつある現状を描く。つづく6章「先住民化の隘路」(齋藤剛)では、モロッコのアマズィグ人(他称ではベルベル人)の先住民運動の事例を通じて、歴史の再構成の新たな展開を追う。モロッコのアマズィグ人にとって、アラブ人のイスラーム文化と自文化の差異化を図ることは困難であるという。ここで運動指導者は、植民地支配期の民族観念を継承しつつも、独自にそれを組み換えることによって、自文化とアラブ人のイスラーム文化を融和的に位置づけられるような故郷や歴史、民族を再定義しているという。

7章から10章では、先住民としての権利を主張する人々と、先住民概念を利用した戦略をとらない人、先住民の中で成功していく人と排除される人々の多様な実践を描く。特に7章「国家を超えた先住民ネットワーク」(木村真希子)では、インド/ミャンマーのナガ民族の人々が、アジアの先住民と協力して、アジア先住民連合という国境を越えたネットワークを築き、国家にとらわれない生き方を模索する様子を描く。これは自らのアイデンティティの表明につながる実践でもあると木村は指摘する。一方8章「包摂と排除の政治力学」(小西公大)は、同様の国においてでも「先住民になる」ことを選択しないトライブ、ビールの事例を描いている。インドにおけるトライブには非常に多様な人々が包括されており、その分多様な戦略が

とられる。トライブ概念は国内における権利や資源の再分配に関する議論の文脈で顕在化する傾向にあり、先住民概念のようなグローバルなネットワークに参入するという戦略がとりにくいという弊害についても言及された。

9章と10章では、先住民の権利や文化が認められる一方で、そこから排除される人々がいることに焦点を当てる。9章「誰のための伝統文化か」(中田英樹)では、グアテマラのマヤ系先住民の中には、先住民文化として認められるコーヒー栽培を行なうことで経済的に豊かになる人々がいる一方で、伝統的なトウモロコシ栽培を行なう人々が排除され、忘れられ、先住民として生きることすらできなくなっていく状況を描写する。10章「先住性と移動性の葛藤」(丸山淳子)ではボツワナのサンによるグローバルな先住民運動への参加と、土地権利回復をめぐる裁判の事例を取り上げる。裁判判決によって、サンの人たちは故郷に戻る権利を認められた。しかし一方で彼らが長らく営んできた移住生活そのものには焦点が当てられておらず、かえって先住民の遊動生活を阻んだり、定住生活への移行を強いたりする可能性さえもつ結果となってしまうという矛盾を指摘する。

加えて本書の内容を更に豊かに魅力的にするのが9本のコラムである。「国内に先住民はいない」という立場をとることが多いというアジア諸国の中からタイの遊動民を取り上げた事例(コラム②)、国際的には先住民であるが、国内では「よそ者」として捉えられるカメルーン・ボロロの事例(コラム⑥)、先住民運動とは異なる形で民族自治を目指し

ており、同時に避難先の地域への愛着も垣間みせるチベット難民の事例（コラム③）など、それぞれのコラムは、先住民運動や「先住民」概念をめぐる問題群の複層性を浮かび上がらせることに貢献している。

本書は、先住民にとって歴史的な出来事であった、2007年の国連先住民権利宣言から10年が経ち、その後彼/彼女らの生活がどのように展開しているのかを描く。先住民を名乗る人々を中心に、「先住民」概念をめぐる非常に多様で柔軟な人々の実践を描くことで、敢えて一定の価値判断を下さず、読者に問いかける。読者は、先住民が主体として描かれる世界を垣間み、たとえば沖縄やアイヌなどの地理的に身近な例を学ぶ中で、「自分は誰なのか」「搾取者と被搾取者という社会構造の中で自分はどうあるべきなのか」という、重要な問いへと立ち戻らされる。抑圧的な権力のもとで、自らの権利や自由を模索し生きる人々の姿を描いた本書は、先住民研究を志す者のみならず、現代社会の行き詰まりや、不均衡な社会構造、権力をめぐる問題群に関心を寄せる多くの人に新たな視点と可能性を喚起するだろう。

本書の多くの章が指摘する先住民の政治戦略的な側面は、先住民をめぐる様相の重要な側面である。しかし一方で、先住民は、現代世界を生きる多くの人々と同様に、常に戦略的であるわけではなく、政治とは直接関わり合いの無い人間関係や日常生活を営んでいるはずである。権利宣言が出された後の世界は、人やモノ、情報のネットワークがこれまでになく拡大している。そうした状況の中

で、本書に登場した人々は、どのように文化や習慣を生き、同じ社会に生きる先住民ではない集団とどのような関係を築いているのだろうか。現代の先住民の生活世界を描くこともまた、先住民を知り、そして現代世界を問うために必要な要素であり、今後こうしたことに主眼を置いた研究の発展を期待したい。また本書では、「文化」という語が繰り返されるものの、文化概念自体に関する定義や議論は行なわれておらず、「文化」が排他的で固定化されたものであるかのような印象さえ受ける。「文化」の動的で流動的な側面や、戦略としての文化概念に着目した議論についても言及されるべきであったといえる。

本書は、先住民の特に政治戦略的な側面に着目した包括的な研究書である。現代においては、先住民の権利が部分的にはあるが確実に認知されるようになりつつあると同時に、その文化が映画や漫画、アートなどのコンテンツとしても扱われるようになっていく。本書は、先住民を主体とした世界を描くことによって、さまざまな情報にさらされる私たちが、単に先住民をロマンティックな他者として考え、再び彼/彼女らの主体性を無視してしまうような危険を遠ざけてくれる。そして、差異と多様性を含みながらいかに社会的包摂を実現するかという難問に果敢に取り組む重要な著作である。